第95号
2023/4

# PVかながわ ニュースレター

News

## EV+V2H導入に関する補助金
## 2022年度の補助金使用実績を紹介

日産自動車は昨年夏に軽自動車タイプのEV「サクラ」を発売した。補助金を考慮すると購入しやすい価格設定のため、購入を検討されている会員の方も見受けられる。その場合、卒FITの方は、自宅で太陽光発電によって充電する「SolarEV」のみならず、V2H（Vehicle to Home）を導入して車に貯めた電力を夜に家で使用して電力会社からの買電量を減らすことが可能になる。EV+V2H導入時の高額な補助金が出ているうちに導入するのも賢い選択だ。筆者は昨年度その補助金を使用してEV+V2Hを更新したので、その紹介と、今年度（2023年度）の補助金の動向を説明する。

今年度のEVに関する補助金は2022年度とほとんど変更はない（下図の赤字部分が変更点）。今年度は令和4年度の補正予算の内容が継続されるので、この表が本年度も有効になる。日産のリーフもサクラも外部給電機能があるので、補助金の上限額は「条件付き」を見て頂きたい。この補助金に県や市町村の補助金が加わるが、昨年度に上限20万円あった県の補助金は、今年度は撤廃されてしまった。横浜市には補助金がないが、多くの市町村にはかなりの補助金がある（https://www.evlife.co.jp/subsidy/prefecture/kanagawa 参照）。

（経済産業省「補助要件の概要」資料より）

V2Hの国の補助金は昨年度の補正以降同一で
・設備費：上限75万円（補助率1/2）
・工事費：40万円（個人）（補助率1/1）
となっている。県の補助金は今年度分がまだ明らかにされていないが、同一項目の予算が可決成立しているので、上限20万円（補助率1/3）＋EV新規導入加算額10万円は継続されると思われる。昨年6月頃から顕著になったことだが、需要の急増や部材の供給不足等により、V2Hの納期が極端に長期化している（半年以上の遅れ）。また、特に予算額が少ない県の補助金で、予算上限に達すると申請の受け付けが終了してしまうので、早めの申請が望ましい。

今年度の各補助金額は昨年度とほぼ同一なので、筆者の昨年度の補助金使用実績を紹介し、皆さんの参考にして頂きたい。

・EV補助金
国：786,000円　県：20万円　合計：986,000円
・V2H補助金
国：399,000円　工事費補助金：26万円
県：133,000円＋加算額10万円　合計：892,000円
実際のV2H設置工事費は1,163,800円だったので、約80%が補助金で賄えたことになる。　（田辺記）

## 世話人から

**連絡事項**

「フォーラムPVかながわ2023」の講師資料と質疑応答をホームページに掲載しましたので、ご覧ください。
https://pvkanagawa.livedoor.blog

**今後の予定**

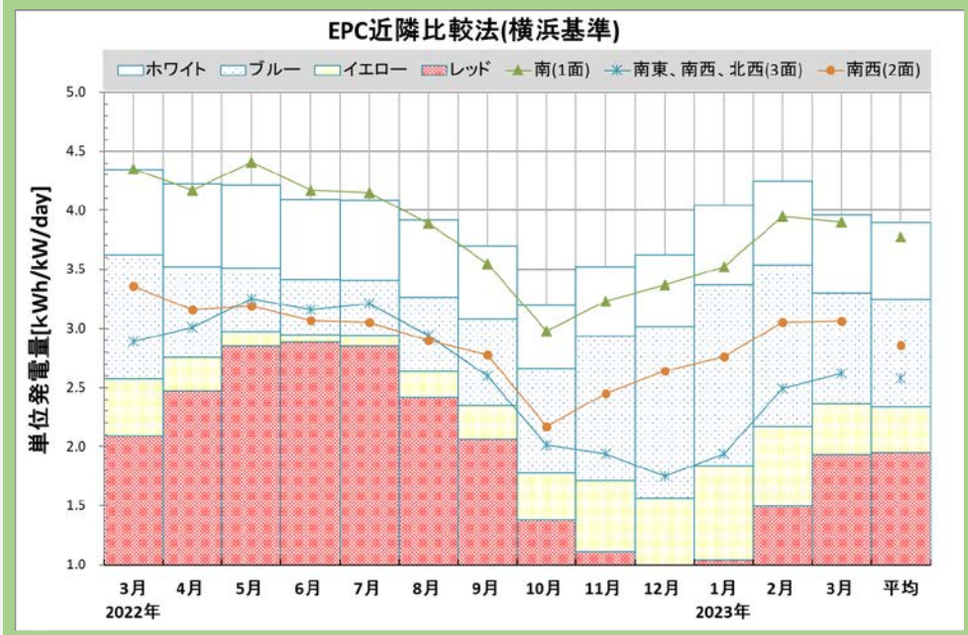
**「かんきょうフェア2023」（さがみはら市民若葉まつり内）ブース出展とソーラーランタンワークショップ**
日時：5月13日（土）14日（日）

**横浜開港祭「ソーラーバッタワークショップ」**
日時:6月2日(金)10:00～16:00（夜、花火大会）

**「出前発電所をつくろう！」ワークショップ第36回**
日時：6月4日(日) 13:20-16:30
会場：かるがも3F（星川駅）
（参加者募集中！）

**さがみはら環境まつりブース出展**
日時: 6月25日（日）
会場:ユニコムプラザさがみはら

## 今月の単位発電量！




横浜の日照時間は平年並みで、全国に比べ物足りない発電量かもしれません。気象庁によると3月は、「大陸からの寒気の影響を受けにくく、南から暖かい空気が流れ込みやすかったため、気温は北・東・西日本でかなり高く、月平均気温平年差は、北日本で+3.4℃、東日本で+3.4℃、西日本で+2.6℃で、1946年の統計開始以降で3月として北日本と東日本で1位、西日本で1位タイの高温となった。日照時間は、高気圧に覆われやすかったため、ほぼ全国的に多かった。特に、北・東・西日本日本海側と北・西日本太平洋側でかなり多く、北日本日本海側と東日本日本海側では1946年の統計開始以降で3月として1位の多照となった。降水量は、西高東低の気圧配置となりにくく、気圧の谷の影響も受けにくかった北・東・西日本日本海側で少なかった。」

単位発電量とは、1kWあたり、1日あたりの平均発電量です。毎月の発電量[kWh]を設備容量[kW]と日数で割ってください。
平均は直近12か月の単位発電量です。一般的に単位発電量は、ブルーの範囲になることが期待されます。北西など、やや北向きがある発電所はイエローになることもありますが、レッドが続く場合は、メーカなどに相談することをお勧めします。
※近年の太陽光システムは均質化や効率改善が進み、2000年初頭の物に比べ、実発電量が10%以上多くなることもあるので、補足としてホワイトを設けました。